

2024年9月2日(月) 晴れ

大阪は台風10号の大きな影響はなかったが、九州や四国、そして関東がすごかった。また新しい台風が発生しそう、シーズンがすぎるまで、しばらく翻弄される。

— コミュニケーション —

問題の原因をさらに掘り下げて、真因にたどりつく。それが「コミュニケーション」にかかわることも多い。大企業の不正問題などの外部調査の報告書で、「おかしくてもものが言えない組織風土…」といった文言をよく聞く。

個人の日常生活でもしかり。異質な個体どうしのコミュニケーションにはギャップは付きものだから、意思や意図の肝心なところは外さず伝えなければ誤解を生む。場合によっては、トラブルに発展する。

まだ誤解の段階でどちらか一方が気づき、解消のアプローチをすれば事なきで済みそうだけど、そうでなければ、裁判沙汰になることもある。日経の日曜版にそんなケースが連載で紹介されていた。

しっかり伝えたいけど、そうできないという人や状況もある。多くを語らなくても通じる人がいて、一方で言葉をかさねるごとに、語っている自分がみじめに感じてくることもある

その他、あれやこれや、コミュニケーションについて考えると、限りない、果てしない。個々人の生活上では、最後は、どうしても通じなければ前向きに諦める。それによって、視界がまた開ける。

2024年9月4日(水) 晴れ

朝一番からよく晴れている。ようやく朝晩はしのぎやすくなってきた。9月に入ったし、そうでなくっちゃ。7日は「白露」。

— こころと情 —

目は脳の一部が出ているようなものといい、手は脳と一番つながっているという。漢字もスマホで簡単に調べられるけど、視ただけでは意味を身心で捉えられないので、これぞという漢字は必ず手書きする。

先月から『数学する人生』を再読していて、今さらながら、「心」や「情」を調べてみた。日常的によく使われ、誰でも知っているつもりになっている漢字ほど、あらためて感心すること多し。

「こころ・心」の説明には4項目あり、第一の項目はさらに10に分けて説明されている。たとえばその一つには、「自分と異なるものを認め受け入れる余裕、度量」。

「情」には7つの項目があり、第一に、「物に感じて動く心の働き。感情」、第二に、「他人に対する思いやりやの気持ち。なさけ。人情」と続き、第4には、「意地」もみえる。

『常用字解』(白川静)には、『礼記』に「情は学ばずして能くするもの」とあるそうで、つまり才能であると解釈しているとか。

「岡潔」の話では、人間らしい情は赤ん坊にみえ、「大人になるとそうはいかなくなる。その主な理由は、自己中心の濁りですね」。このく自己中心の濁りですねが、静かに心をさす、耳にのこる。

詩は読み終えることがないという。『数学する人生』の「第一章最終講義-懐かしさと喜びの自然学-」は、詩だ。

2024年9月9日(月)重陽 晴れ

8月にもどったような暑さがここ数日つづく。すこし秋めいてホッとしていただけに、カラダが落胆している感じ。予報では10月初めまでこの暑さとか。体調維持、肝心。

— 重陽と詩と —

『こよみのページ』によれば、「中国には古くから山に登って天と地の神を祀るという思想がありました」。どうせなら陽の数字がかさなり陽気が最大となる9月9日ということか、中国では重陽の日に家族や友人どうして丘や山にのぼる習わしがあつたそう。今もあるのかな？

中井先生の本の中に、「文化大革命の時にも、教養人は古式にのっとり、ひそかに丘に登り、詩をつくつたらしい」と書いてあつた。そして「ひょっとすると中国文化では、詩をつくるのが人間の条件ではないだろうか」。

というのも中医学経験10年の留学生の指導にあつた時、中井先生の詩が彼の目にふれ、留学生仲間にコピーをして配り、その後から彼らの視線や接し方が明らかにかつたのだそう。

詩人の友人によれば、日本の詩人が韓国へ行くと気持ちがよくなるらしい。日本では、ふーんという感じでしか受けとめられないことが多いけど、韓国では尊敬、憧れの眼差しで見られるから。「両班ヤンバン」精神が今も社会に根をはっているせい。

10代の頃というのは、未熟だけど、多感な面もあり、詩をつくるまね事をしたりするもの。思い出すと面映ゆいが、経験はある。才覚もセンスもないから詩とは無縁。重陽の今日は、栗饅頭でも買って食べるか。

2024年9月11日(水) 晴れ

窓の外は隣のビルの外壁。白いから太陽がよく反射する、いかにも暑そう。15分程度歩いていけるところにも、足が遠のく。今日も近場ですすか。

— わからなさ —

インタビューで「ほんとうに偉いは同じようなことを言っている」と語ったのは「岡田准一」。たしかに、難解な本を読むのに、「中井久夫」は、「私の〈精神の顎〉にとって一種の快感であった」と言い、「岡潔」は、「わからなさのかもしれないあやがひどくおもしろかった」と言う。

その足元ぐらいは経験はある。わかるようで、説明せよといわれれば、できず、でも頭の中ではまとまっているような、そんな感じ。快感とまではいかないが、頭をよく働かせている満足感はある。

二人の超人からすると、その働かせ程度も4%ぐらいか。わからなさに挑めるだけの頭脳をもった人の頭の働きとはどういうものか、凡人には知り得ない、わかり得ないから、4%でも高いぐらいか。

何もわかっていない、わかりえないと、ようやくわかってきたが、それだけにわかろうと努力するから成長や発展がある。それでもまたまた、わかったつもりでもわかっていなかったとわかるのが常。

それをくり返していれば、4%も10%ぐらいまでは上がる？ いやいや5%どまりかもしれない。

2024年9月13日（金）

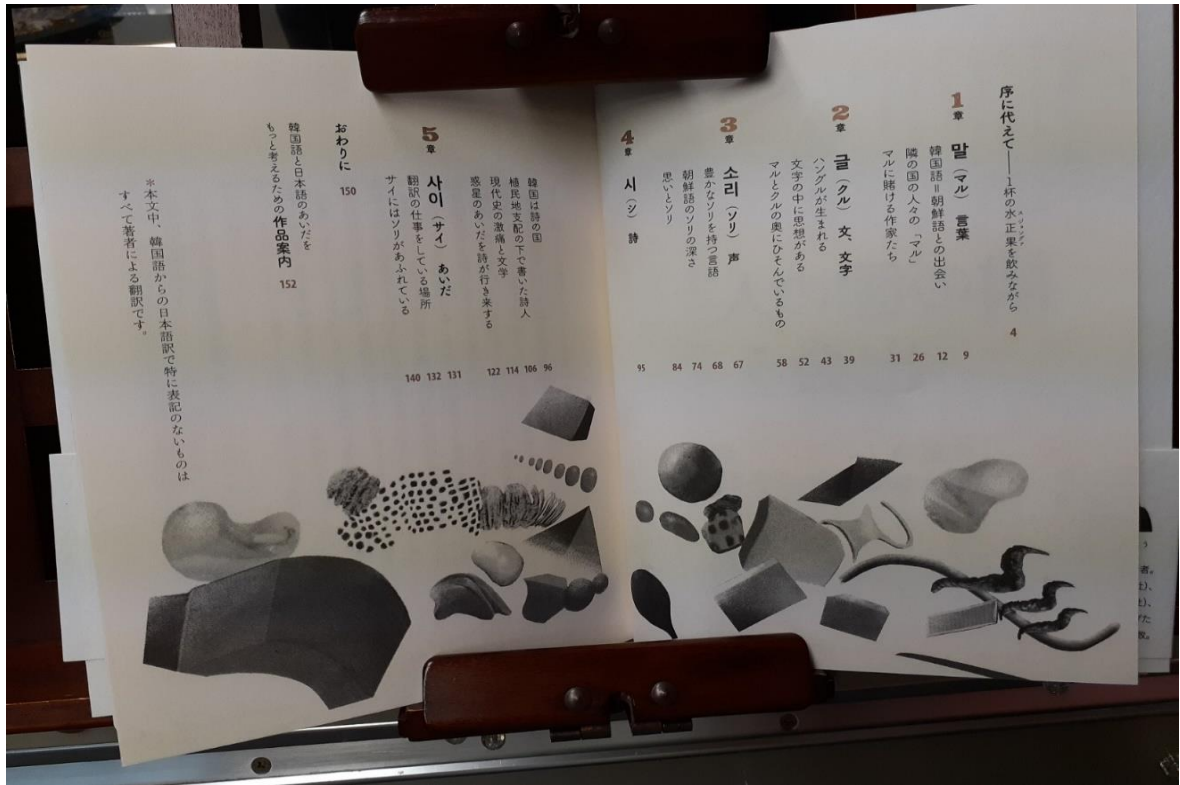
朝一番に届いた本の贈り物

先月末に出たばかりの『隣の国の人々と出会う』（斎藤真理子 創元社）。大学や専門学校などで英語を教えている知人によれば、今の若い人たちは、英語よりも韓国語を憶えたいと言うそう。

本の目次をみれば、言葉を通して、〈あいだで考える〉ことになっていて、4章の「詩」が興味深い。

あいだで考える。せっかくだから、サイトにちよっと考えを以下のとおり、書いてみました。





2024年9月13日(金) 曇り

昨夕事務所を出ようとしたら雨が降り出した。30分ほどかなり激しく、雷鳴もとどろいた。最近では雨がふっても夜あまり涼しくならない。今朝も暑く、駅へむかう足取りも重くなる。秋は名ばかり。

— 「あいだで考える」 —

「あいだで考える」シリーズ〈韓国語と日本語のあいだ〉『隣の国の人々と出会う』(斎藤真理子 創元社2024年8月)をもらった、今朝とどいた。「あいだで考える」というのが、いい。

「わたしたちって、社会への感度が高いよね」。10年ほど前だったか、30年以上の付き合いになる友人が言った。そうなのか、感度が高いのか…。そういう視点はなかったから、合点があった気がする。

つねに社会に気にいっているし、書いたり、話したりもごく自然にしているが、それは〈あいだ〉にいるからかもしれない。日本で生まれているけど日本人でなく、韓国へ行っても〈同じ〉と思われず、不安定な立場だから、せめて社会が安定していないと困る。そこでおのずと社会の様相に感度が高まる、そういうことではないかと。

たぶんそのおかげで、おのずと、「自分で考える」ことにもつながった。もって生まれた本質、資質が大きいにしても、どちらでもなく、どちらでもあり得るとい位置づけは、考える幅を広げることになったのではないかと。

何よりシガラミがないのがよかった。制度としての善し悪しはさておき、選挙権がないことで、「世間」や「シガラミ」から遠ざかっていられたのではないかと。自分なりの観察眼にすぎないが。

仕事柄、個々人の仕事観、社会観、価値観などを聴くことが多い。対話の中でこちらが、“そういうことは無いなあ…、そんな風には考えないなあ…、そんな風にはしないなあ…”ということが少なくない。

相手からすれば、それがまた驚きのようなけど、おかげで、ずいぶん自分のことを知ることになった。年々、少しずつ自分を覚ってきたと思う。いかに自分を知らなかったかを知り、これからもたぶんそのくり返し。

仕事でも仕事以外でも、考えてみれば、「あいだで考える」のはごく当たり前のコンテクスト、自分にとっては常態。ときどき人から「バランスがいい」と言ってもらうが、「あいだ」にいるからだ、たぶん。

2024年9月14日(土)

フィンランドの『ハビターレ』に出展している友人から写真

妹と家でお昼ご飯をたべながら一杯やり、どうしているかと話題にしていたら、夕方に本人からメールあり。

短い文面ながら、世界に開眼、世界で活躍する人たちに開眼、刺激的な毎日をすごしている様子。

アクセサリー中心から、数年前に京都の伝統的技術の第一人者の工房に通い、集中的に学んだ技から作品づくりはオブジェへと展開し、新しい試みをかさねている様子は、「作家」の道に入った感。

さて、どんなお土産話がきけるか、たのしみ。





2024年9月17日（火）

十五夜、東の空に月の出まもない月



2024年9月18日(水) 晴

昨夜は十五夜、今夜満月。大阪の月の出時間は18時11分。今日は「女性チャレンジ拠点」の担当日。室内から満月の出が望めそう、たのしみ。

— チャンス —

仕事で、相手が女性の場合は、『男と女の生産性』をよく紹介する。2006年6月5日日経夕刊の「あすへの話題」に載ったコラム。書き手は当時「総合研究大学院大学」教授だった「長谷川真理子」。女性の生産性のピークは45歳から65歳というのが、女性たちを勇気づける。

この説を地でいく女性を何人も知っている。ある人は50代に入っすぐに独立をした。結婚生活も絶ち、地方に工房をひらいて移住し、孤軍奮闘をかさねながらも独自の創作活動を続け、10年になる今年、世界へ出る機会を得た。次の10年はまったく違う次元のステージになりそう。

『プロ講師になろう塾』もこの土曜21日で実質最終回。受講者たちは「わたしはどこから来たのか、わたしは何者か、わたしはどこへ行くのか」をあらためて考えることになったはず。『チャンスは心構えてきている人だけ覇盾する』は正しい。どうあれ人生をクリエイティブしていくのは自分自身。

子どもだけでなく、誰でも人の背中をみている。「真摯な姿勢」という言葉があるが、それが映る。古代ギリシャでは未来は背後にあると考えたらしい。背中に映る真摯な姿がチャンスを引き寄せ、よき未来へとつながる。そんなイメージがわいてくる。

2024年9月19日(木)

早朝、満月の入り直前



2024年9月20日(金) 晴

ここ数日朝晩もまったく涼しくなく、日中の猛暑がうらめしくなる。いつまでも暑いから秋の予定のことも未だ先のように感じていた。いやはや今年も残り3ヶ月。

— 残したい一番 —

5年ほど前だったか、ある相談者がグリーンケアのワークショップに参加した話をしてくれた。その中で、「あなたがこの世に残したい一番は何ですか?」と尋ねられ、考えさせられたという。

残したい一番…、話を聞きながら、さて何だろうと問いを自分に向けた。答えはすぐに出た。“わたしがこの世にたしかに存在し、生きたという証”。このことを自覚したのはもうずいぶん前になる。

ときどき歴史的資料発見のニュースが新聞に載ったりする。著名な作家の未発表作品だったり、終戦直前に処分されたはずの証拠記録が民間人の家の納屋で見つかったとか。

そんなニュースの一つ、江戸時代の庶民階級の女性が世相や日常を記した文書が見つかったという記事が日経に載った。読みながら、その女性の生活ぶりが、目に浮かぶようだった。すごく印象にのこった。

「柳田国男」は、世に広く知られたものだけが人間の知ではない。無名の、市井の人々の知を含めて、人間の知であると書いていた。その好例でもあるかもしれない、かの女性の書いたものは。

どの時代も社会の狭間で喜怒哀楽の日常をおくりながら自分を生きる人々がいる。江戸時代の女性に、“あなたがたしかに生きたことを、現代のわたしたちはしっかり知りえましたよ”。

事務所開設時からリーズレターを書き、一年がすぎた1996年頃にハッと気づいたこと、それが、“自分の生きた証を残そうとして、こうして書いているのではないか…”。

子どももないし、のこす財産もないし、ただ有るのは自身のみ。いずれポディーもなくなるから、せめて知を表して、存在を現わそうとする。これも欲でしょうね。

2024年9月24日(火) 晴・曇

ようやく、ようやく、涼しくなってきた。日曜の雨の後、夜はちょっと寒いくらいだった。21日の土曜は汗だくだったから、この急変はまたカラダによくない、気をつけるとして、今年ほど待った秋はない。

— 迎秋 —

日曜、FMから『少年時代』が流れてきた。“…!”、そうそう、これを聴きたい気分、よくわかっている。一回ではもの足りないから、動画サイトを検索して一日流していた。

「夢はつまり…」。「夢はつまり…」。「思い出のあとさき」。これまで何度となく聴いてきたけど、この「つまり…」という言葉に気がひかれた。夢は要するに何だと考えたのか「陽水」は、思い出のあとさき？

「つまり…」は、個人的には、軽々しくは使えない言葉という感覚がある。核心をつき、本人に確信がないと口について出ない。

それを言いきるのだから、「夢は思い出のあとさき」とは、さて…。言わんとすることがわかるようで、はっきりとはわからない。それは作者の胸のうち。

こんなことに頭をめぐらすのも、涼しくなったせいかな。6月末に買い、最初の部分だけを読んでそのままにしていた本も、読む気になった。読み始めると、ずいぶんためになることが書いてある。

合間に、真夏の上着の外れたボタンを付けた。もう着ない真夏ものと一緒にタンスの奥に仮置きした。椅子の麻クッションを綿ものにかえた。小物入れの中をちょっと整理した。

やはり適度な温度、気候というのは、大事。日常生活レベルでの生産性も左右する。寒くなるまでは未だ間があるから、ワークとライフともに細目に動いて、考えて、よい時間をすごそう。

2024年9月26日(木) 晴

今朝は少しむし暑かったが、出かける準備にまったく支障なし、快適。涼しいのはホント、いい。日中は33℃まで上がるようだけど、それぐらいはなんてことない。秋の気候を存分に愉しんでおきたい。

— 自分で「良し」—

今しがたスマホの速報に兵庫県知事は失職を選び、出直し選挙の意向とか。選挙は50日以内に実施されるそうで、結果は興味深いけど、タイミング的に今年の10大ニュースには確実に入りそう。

『終わり良ければ総て良し』を仕事上で時々つかう。ワークとライフにチャレンジを期した相談者の中には、それ相当の逆境を生きてきた人が少なくない。助言の締めくくりに、この言葉を引き、声にチカラをこめ、「そうしていきましょう!」と見送る。

経済的に安定し、むしろ裕福なほどで、勉強も仕事もそれなりに積み上げてきても、人生後半の年をかさねるにつれて、わが身をふり返させられる人もいる。もっと人と対等に、もっと心穏やかに、自分を育てないとだめなんじゃないかと。

若い頃はかなりヤンチャだった人が、人間的に魅力的な熟年になっている場合が有名人にも多い。他人事ながら、よかったですね、努力されましたね、当方もそう努めているつもりです、という感覚になる。

『終わり良ければ総て良し』に向け一歩ふみだした人、その序盤にある人、途上を進む人。仕事をとおしてそんな人たちをたくさん知っている。終わりの姿は十人十色だけど、ともあれ、“こんなはずじゃなかった…”でない、自分で「良し」と思える姿。

そう考えると、傍目には「良し」と見えなくても、本人が「良し」ならそれもよしか。ただし身近な人たちは困るかもしれないけど。

2024年9月28日（土）

サントリーのビール工場とウイスキー蒸留所見学

JR環状線福島駅から3分ほどの「と金」さんの35周年記念見学ツアーに誘っていただき、初めて尋ねたビール工場と蒸留所。すっかりサントリーのファンになりました。

JR長岡京駅に朝9:20集合。無料シャトルバスでまずはビール工場の方へ。大きな講堂のようなところがセミナールームで、ここでまずは簡単なレクチャーを聞いた上で、40分ほどの見学へ。



ビールの醸造の大きな器具が階上にあって、外の山並みが見える場所にあるなんて、新鮮でした。何台あったか、いやー、それにしても働く環境がいい。説明を聞いていると、醸造家のチカラが製品の良さを左右するようなので、五感を損なわないような配慮でもあるような…。



おたのしみの試飲。さすがに紙コップのようなことはなくて、ちゃんとしたグラスに、一杯目はプレミアムモルツ、二杯目の3種類から選べるようになっていて、しっかり堪能。



ビール工場を後にしたのはお昼前。最寄りの駅まで酔い覚ましに歩き、一駅先の「山崎」へ。駅から蒸留所へ向かう途中に古い料理旅館があり、ここで昼食が用意されていて、名物の天ぷら丼をいただく。抹茶のムース餡添えのデザートのをんびり食べているうちに移動の時間。いよいよウイスキーの蒸留所へ。

山崎には、ずいぶん前に「大山崎山荘美術館」へ行ったことがあって、この蒸留所を横目に山上の美術館へ向かった。とにかくロケーションがいい。海外のウイスキー愛好家にもすっかり有名になっているこの蒸留所。実際、中に入って2階のフロアーから1階の有料試飲コーナーを見下ろすと、外国人のカップルやグループの姿あり。

ちなみに有料試飲には制限があり、3杯まで。



樽の中はまだどの銘柄になるか決まっていなくて聞いてビックリ。ブレンダーが毎日味をチェックしながら、「白州」、「山崎」、「角」にするか、決めるのだそう。



見学のあと、大きなセミナールームへ戻ってみると、すでにこのようなセッティングがしてあり、講師の案内のもと、なんと5種の試飲。さらにプラスアルファで「山崎」のハイボールとナッツまで出た！

「と金」さんはサントリーにとってプレミアムのように、参加したわたしたちも特別待遇をうけた。なんとも充実した、楽しい休日、「大人の遠足」だった。

